

今西錦司の世界を語る——解説にかえて

森下正明

梅棹忠夫

河合雅雄

私にとっての今西錦司

河合 私、きょう、司会というよりも進行役を仰せつかったわけなんです、今西さんの「今西錦司の世界」という座談会が雑誌『アニマ』に十二回連載されて、それが今度、単行本にまとめられる。で、その解説なり、入門書の役目をするような座談会を、というのがきょうの主旨なんです。

この座談会は、十二回のテーマに分けて今西さんの学問・研究の軌跡をたどっているわけですが、実に多方面のことが扱ってありますし、一見読めばわりに楽に読めるといふような性格のところもあるんですけども、ちょっと腰を落着けて読んでみると、非常に深遠な思想が語られている。あるいは片言隻句の中に、非常に鋭い洞察力のきいた問題が提示されている。そうした点をいろいろな角度からさらにつっ込んでお話しいただき、また、今まで触れられていない側面にも射程をあわせて、今西さんの人と学問をいっそう浮き彫りにしたいと思えます。そこでまず、今西さんとの出会い、あるいはかかわりというところから話をはじめたらと思うのですが。

といいますのも、今西さんとかかわり合いについて、きょうの出席者の三人がちょうど世代的な段階をもっていていると思うからです。たとえば森下さんは、今西さんの弟分みたいな関係じゃないかと思えますし、梅棹さんは今西さんの若いときの、弟子というよりも、かなり友達づき合い的な関係をもった弟子ですね。ぼくらになると年齢差もありますし、ほんとに弟子という関係になってきたと思うんです。それと今西さんとかかわり合い、出発点が三人三様で、ずいぶん違ふと思うんですね。そういう点で、初めにおのおの今西さんとかかわり合いみたいなことを話せば、今西さんの歩みの歴史のアウトラインが描けるんじゃないか、そんな気がするんですけれども……。

梅棹さんは中学生あたりから今西さんをよく知っておられたんですか。

梅棹 こっちは知っている。向こうはご存知ないわ(笑)。まあ事実上は、高等学校のときからやね。

今度、この座談会を読んでみて、いまぼくは大変不思議な感じをもっているんだけどね。今西さんという人は、やっぱり遠いところにいやはる人やという感じが、ぼくにはありますなあ。高等学校時代あるいは大学時代から、世代は少し違ふけど、ある意味では一種のコリーグであったという意識がありましたけど、この私のもっていた

コリーグ感覚、仲間意識というのは間違いだったんじゃ
ないかということ、私はいま感じているんですね。森
下さんやら、これ、だいぶ違うと思うんだけど。

森下 さっき弟分といわれたんだけれども、ある面では
そういうところもあったかもしれないけど、やっぱり弟
分と弟子のあいの子みたいなものかもしれないね。

河合 なにか師範代みたいな感じをぼくらが受けるの
は……。

森下 いや、とんでもない(笑)。

河合 ポナペ島とか、興安嶺とかのことは、ぼくらは全
然知らん世代なんです、そのときに森下さんが副隊長
やら分岐隊長なんかになっておられるでしょう。だから、
ぼくはなんとなく弟分か師範代みたいな印象をもっとる
んですけどね。

森下 ぼくと今西さんとの出会いは、ぼくが京大の昆虫
教室へ入ってからですわ。その時はむしろ今西さんは
大先輩という感じやったね。その大先輩という意味が、
単に昆虫学の大先輩ということではなくて、非常に広範囲
にわたっての、博物学者としての大先輩、あるいは地理
学者としての大先輩、そういうふうな印象でもって今西
さんの書いたものなんかを一生懸命読んで勉強しようと
したわけですよ。

ただ、昭和十四、五年ごろになると、今西さんの古い

AACK(京大学士山岳会)の仲間の人たちがあっちこっ
ち分散してしまつて、それまでいつも仲間と一緒に行動
してはつた今西さんが、ひとりぼっちという少し語弊
があるけれども、わりあいにそれまでの仲間と離れた暮
らしをする時期に当るわけですが、そのときにちょうど
京大の中で興亜民族生活科学研究所というやつができま
して、今西さんはこの所員になられた。そのときに私に、
その助手になつて蒙古調査に出かけんかという誘いを受
けて、大喜びでひきうけた。

ですからそうなると、さっきの弟子というより、まさ
に先生と助手の關係ですよ、形の上からいうなら。し
かし、ぼくはやっぱり昔からの癖で今西さんを「今西先
生」と呼んだことはないの、で、「今西さん」で通しておっ
たんやけども。

梅棹 ぼくはこのあいだの講談社の『今西錦司全集』の
解題の中では、「今西先生」と書いた。そしたら上山春
平さんから「きみはなんであんなこと書くねん。全然似
合へんで」って言われて(笑)。

森下 あ、「今西先生」と書いたのは、あんたえらく評
判悪いのや。

梅棹 そのこととね、さっきの、つまり今西さんは非常
に遠いところにいやはる人やと思つたということと關係
があるんです。それは、やっぱり学問の世界では「今西

先生」なんです。正直言うて私は、この『アニメ』の連載座談会はその意味で大変気に入らない。これは学問の話に傾き過ぎている。ヒマラヤや山のことを語っているときでも、何かそういう傾きがある。動物学ないしは進化論への傾斜が非常に強いわけです。それはぼくは、今西さんだんだんそうなってきたんやと見ている。森下 それはそうなってきたんや。もつとも、なってきたんや。はったというより、やっぱりそういう要素は初めから強かったわけではあるけれども。

梅棹 初めからありますけれども、ちょっと今西錦司の世界」というには偏りが強い。もう少し違う見方もたくさんあるのに、どうもこの中には出てこなかった。そういうことを私はひしひしと感じているね。

これはどういうことか。まあ、いまの『アニメ』の連載が学問に傾き過ぎているというのを、もうちょっと主観的な私の気持ちに即していえば、今西さんを『アニメ』にとられたという感じがあるのやな。今西さん、どうも違うんだ、こういうものと違う。つまり、今西さん全く科学者みたいな顔になってはるやないか(笑)、ちょっとそういう感じがあるのやけどね。それはわれわれの学生時代からも確かに科学者で、われわれも学問習うた。教えられたにちがいない。

「習うた」といまいうて、「教えられた」と訂正したの

も理由があるんです。私は一べんも今西さんの講義聞いたことない。

森下 それはぼくも、今西さんの講義なんて一回も聞いたことない。

梅棹 それは弟子と違うんですよ。

河合 ぼくもないですね。

梅棹 とにかく記憶にあるのは猛烈な闘争、終始闘争であつた。

森下 今西さんは、そういう古い仲間があり、また梅棹さんはじめ若い仲間がいろいろできているんだけど、そういう全体の仲間の中で多少ぼくなんかは、あるいはその当時一緒に昆虫教室にいた可児(藤吉)君なんかは、少し異質な面がありますよ。それは何かというところ、ぼくらは山歩きも好きで歩いたりしていたけれども、たとえば山岳部に関係があつたわけでもないし、普通の意味での山仲間という形とは違った存在であつたわけで、むしろぼくらが今西さんと結びつけられたのは、学問の世界を通してということであつたわけですよ。もつとも今西さんといっしょに行動するようになってからは学問以外にも教えられる所が多かつたですがね。だから今西さんの科学者としての側面にもぼくらとしては親近感を感じるわけや。

梅棹 今西さんの学問の初期の段階における共同建設者

が可児藤吉、森下正明というところなんで、私らはちょっと違うわけや。私なんか今西さんと親しくなった段階で、今西さんのセオリーは大体できておるわけですよ。それからあとは今西さんは生物学、ほくは動物学の学生だったけど、生物学を通じての理論論争、チャンチャンバラバラ、毎日会うたんびにチャンバラやっておったけど、同時にそれは人生百般についての、一種の知識人としての猛烈なる思想訓練だったといえる。だから、こういう整然たる学問の世界の話と違うんです。もちろん、それを含みながら。だから私は、今西さんはなんやこれアカデミシャンみたいな顔してこういうところへ出てはるという印象がやっぱりある。もう少し違うことがいっぱいあったはずやということなんです。

河合 その違和感というのは……。

梅棹 まあ、たとえていうたら、今日、大学でも高等学校でも入ろうと思ったら、学校だけではあきまへんねや。塾へ行かなあかん。子供はみんな塾いやがっているのやあらへん。喜々として塾へ行つとる。塾のほうがおもしろいということがある。塾のほうはスキンシップの世界で、スキンシップというのは何もなでなでしたりソフトの接触じゃなくて、ゴツンとげんこで殴るスキンシップもある。つまり皮膚と皮膚がぶつかるといふところで、新しい、何か学校と違う接触があるんやね。まあ、私ら

は今西塾で鍛えられてきたんや。

河合 なるほど。

梅棹 私は正規の動物学の学生として入学した。しかし、今西さんは、いわゆる正規の動物学の教授と違いますよ。動物学教室にいやはったことは事実やけど、なんというたかな、あのとき……無給講師や。月給あらへん。どっか変な隅っこにいやはった。ほくが入ったときは大津臨湖実験所にいやはったかな。

森下 その時分から今西塾という言葉がもうすでにありましたかね。梅棹、川喜田、そういう人たちが、いわば今西塾の塾生であつたわけや。またそういう人たちは今西塾に入塾するという、それを目標に今西さんのところへ接触を始めたというような印象をぼくらは受けているね。

梅棹 いや、入塾したのとちょっと違うのよ。四回目の藤田(和夫)の話にも出てきたけど、むしろ、われわれのグループは先にあつたんで、その大将に今西さんと呼んでこういうて、引っ張りこんだ。そういう状況ですよ。河合 塾頭と塾生というのが非常にびったりしていた。

梅棹 まさにそういう関係や。私が大学に入ったときは川村(多実二)先生がまだ頑張ってた。それから在学中に宮地(伝三郎)さんが来やはって、宮地さんの最初の弟子だということになっている。川村先生の最後の

弟子で、宮地さんの最初の弟子だ。それはつまりオフィシャルの関係においてそうだ。同時に、夜は塾のほうへ行ってるわけや(笑)。その二本建ての関係というものがずっと続いているわけです。

文化史の中の今西錦司

梅棹 それからもう一つ、この座談会の私の違和感をいえば、いろいろいきさつの話が出ますがね。今西さん自身からも語られているし、ほかの加藤泰安、鈴木信、藤田和夫、川喜田二郎というような、かなり年代の古い人からいろいろ語られていますけれども、私、やっぱりどうも気に入らんことが多いんです。これは違うと……。

つまりそれは、あまりにもきれいに整理され過ぎていて、今日的な立場だけから語られているような気がする。歴史としては、やっぱりもう少し違った系が何本も何本もあつたように思う。こういう座談会ではそういうものはなかなか出せないでしょうけれども、これは日本の学問の歴史にとって、あるいは日本の科学史にとって大変大事なことである。あるいはもうちょっと多くの気持からいうたら、日本の、大きくいえば文化史にとってですやね。あるいはインテレクトチュアルというものの形成史というようなもの、あるいは社会史というようなものを考えるときに、大変意義のあることがいっぱいあるんだ。

そのところが全部落ちて、ただの学問になってしまっているところがあるが不満なんです。

河合 梅棹さんが冒頭に今西さんは何か遠いところにいやはると言われたでしょう。初め、何のことかと思つていたけれども、塾頭と塾生の話になると非常によくわかつたんです。というのは、ぼくらは今西さんとのスキップがない塾生だと思つてます。

梅棹 ぼくらはスキップだけがある(笑)。

河合 ところが、スキップがないときからのことが、むしろこの座談会では語られているんだと思つてますよ。だから、ぼくはこれを読んであんまり違和感がないんですね。

梅棹 ないやろなあ。ぼくらから見たら、やっぱり違和感がある。

河合 今西さんのいわゆる弟子といわれる連中の中には、山と探検を通じてきた弟子というのと、あるいはいわゆる学問や興味を通じての人づきあいというのと、ぼくや徳田(喜三郎)や、藤岡(喜愛)さんとか、あるいは牧(康夫)さんとか、全く山に関係のない連中が、学問だけを通じて今西さんの弟子になったところがある……。

梅棹 ちょっとここで、「山」のことをいわれると、違ふんです。「山と探検」とは違う。ぼくがさっきから言うてるのはね、現代日本におけるインテレクトチュアルの形式

の歴史の問題なんで、これは山と探検とにおけるつきあいだ、といわれるとやっぱり違うということですよ。そういうふうには受け取っている。つまり、それはもともとフワッとした豊かなものなんです。これは、この日本という一個の文明の中で、昔から知識人、インテレクチュアルというものが再生産されてきている。その中で、一九三〇年代以降に一つの新しいタイプのものが形成されてきた。そここのところの問題だ。山や探検は、その一つの契機になったことは事実なんです、しかし、それだけではなからう。

たとえば、私なんか、文学を読み、哲学を語りというようなことは、全部今西さんからたまたま込まれたことなんです。文章が今日書けるようになったのも、こういう座談会で一かどのことをしゃべれるようになったのも、全部今西錦司という人物によって開発されたことなんだ、そういうことを言いたいわけなんです。それを単に学者として、今西学というところへ閉じ込められると、ちょっと私の気持からそぐわないものがある。もちろん、学問として非常に大きなものも私は今西さんからちょうだいいたしました。しかし、どうもそれだけではないんやね。河合 それは非常に大事なことですね。実は、ぼくらはそれがいちばん知りたいですよ。ぼくなんか弟子といわれているんですけども、いまいわれたインテレクチュ

アルの形成の歴史といえますか、お互いに泥沼で泥をはね合いながら、その泥を浄化していったというような、そういうところが、ぼくらは今西さんとのつき合いの中にないんです。

梅棹 もうコースができていた。

河合 だから、今西さんとぼくのつき合いは、いろんな意味で平野部であった。山でなくて平野部であったという感じが非常に強いんですね。

梅棹 そのこのとこね、森下世代と河合世代の中間にぼくははさまっているわけや。森下世代まで学問なんです。それから河合世代も学問なんです。そのまん中に、必ずしも学問といえない世代がある。

森下 ただし、ぼくの世代の前には、山のグループがあったけどね。

梅棹 それでぼくとしては、今西さんとぼくらのつき合いは山や探検といわれると、やっぱり困ります。山と探検は、ぼくらと今西さんとの関係のなかの、ほんの一部にしからずない。

河合 何か人間のぶつかり合いみたいなの……。

梅棹 ぶつかり合いであり、それからやっぱりこれは文明の問題だ。近代日本文明の中でこういうことが起こったんだという、そういう話だというふうにとらえてほしいわけ。ぼくらの気持からいうたら。

それはね、こういうことなんです。私の最も親しい友人の一人ですが、東大教授の中根千枝さんという人の書いた『タテ社会の人間関係』という本がありますね。日本の社会のある一面をスパッと切ってたいへんおもしろい、実に見事な本だと思うけれども、今西さんをめぐる人間関係は、それとは違う話なんだということなんです。

つまり、彼女が着目しているのはね、大学なんかも全部タテ社会になっているんだということなんです。ところが、私らの塾は、全部ヨコ社会でズバーッとぶち抜いているわけ。藤田（和夫）は理学部の地質、吉良（竜夫）は農学部、川喜田（二郎）と伴（豊）は文学部でしょう。

そういうグループができていくわけです。それで当時の先生たちにしたたら、そういうことが起こるといふようなことは夢にも思てはらへん時代ですわ。つまり、全部上と下との、教授と学生との関係で、命令一下、行けいうたら全員が動くし、あかんいうたら全部ペシヤペシヤとやめるいう、そういうタテの系列化が明治以後、日本の大学ではずっと行なわれておった、その原理と違うものが出てきているということなんです。

河合 構造的な変革——一種の維新みたいなものですね。新しい造山活動といったらよいのか——
梅棹 維新というほど革命的というか、そういう何かし

ようかという意図的なものはなかったかもしれない。これは、時代的にいえば、大正デモクラシーの余波を受けた、昭和初期のリベラリズムというものだと思う。明治以来の官僚的大学の支配というものの中で、いつのまにか違うものが出てくる。その一つの編成原理になったのが山岳部でありAACKみたいな、つまりヨコのスポーツ団体だ。スポーツ団体が入ってきたというのは、ぼくは日本文化史にとって非常に大きな問題だと考えています。今日でも、それがヨコの連携として有効に働いているわけや、ヨコの線が。それは興信所の人事興信録めくってみても出てこない話なんですよ。しかし、日本の社会構造の中には明らかにそれがある。これはあまり表面だつては出ていない。ふつう表面には、たとえば結婚式のときの仲人さんは、会社の社長か、あるいは自分の教室の主任の先生という、そういうタテの線でぐるわけですよ。

われわれのときは、つまりヨコ原理だった。大体森下さんなんて農学部の人ですがな。私は理学部の学生で、なんて関係があるのんやというようなものや。それがなんとなくヨコの、つまり仲間意識というものが人間を結びつける紐帯として出てきているんです。それが出てくるのは、ぼくはやっぱり大正末期から昭和初めの、あの

リベラリズムの雰囲気だと思う。私が高等学校へ入ったのは昭和十一年ですが、そのころには、そういうものが非常に強くあったね。それが大学まで浸透するのが昭和十五、六年ごろや。

森下 学問の世界の中でも、わりあい生態学の関係というものは、タテの線はもちろんある程度あることは確かだけれども、いまのヨコのつながりというものがかなり初めから出ている面がありますね。これはやっぱり、ある意味では若い学問であったということも関係があるのではないかという感じがするんだけど。

梅棹 若い新興科学として、ヨコの連絡というものがかなりものいうてたわけですね。しかしそこが、今西学というものが学問的にも形成されていく上に、たいへん重要なポイントやと思いますね。一種の主流派に対する反逆ということが潜在的にあったんです。

森下 それがね、またちょっと学問のほうへもっていくと、生態学なんていう学問が、たとえば東京やなくて、京都にそういうふうな非常に強い基盤ができたというのは、何かやっぱり伝統的な学界とは違った意味の、新しい一つの気風があったのじゃないかという感じをもってゐるね。

梅棹 京都の動物生態学の基礎をうちたてるのに大変功績のあった人は、やはり川村多実二先生とそのお弟子さ

んたちでしようね。理学部の動物学教室の第二講座です。しかしあの人たちは、結局その新興科学を、旧来の制度とタテ社会の中で位置づけしようとした。一種の官僚機構としての大学の講座制による徒弟支配です。そのところでわれわれの世代で問題が顕在化してくる。つまり、タテ社会の中ではおさまり切らんということが出てくるわけですよ。

河合 そのところがやっぱり塾の問題とかかわると思うのですが、ヨコの関係を切り開いていったものは、文化的な観点からは何なのでしょうか。

梅棹 そこでぼくは、この塾原理というものが、そういう学界あるいは学問的な世界へ持ち込まれることになった原動力は、スポーツだと思う。その点で山が効いている。山は学校さえも超えて、たとえば慶応と三高との猛烈な競り合い、競り合いを通じての連帯、そういうものがあったわけです。明治以後の日本の知識人の編成原理がずっとタテ割り一本できたのが、大正から昭和にかけて成熟してきた結果、こういう別の原理ができたんだと思う。社会的成熟ですね、一種の。

今西錦司の個性とそのグループ

森下 いまのヨコの連帯というか、ぼくら農学部におりながら理学部のゼミナルなんかいつも出ていたといっ

た、いわば学問的な意味では教室とかという形の枠というものをあまり気にしなかったほうで、むしろ新しい学問の建設という意欲にしたがって自由に人とのつながりをもとめ、グループをつくるという、いわばタテ社会への逆行を行なったことになるわけだが、それが心理的にあまり抵抗なしに行なえたというのは、やはりリベラリズムの洗礼を受けた世代に属するというためでもあるやろね。

ただその中で、今西さんをヘッドにしたグループの結合ができてくるということの中には、別の、今度は今西さんのパーソナリティーの問題がそこへ入ってくると思うんです。これが同時に作用している。さっきの教室の中での教授と学生とか、あるいは教授と助手の関係というようなものもちょうた、いわば、塾生と塾の親玉との関係みたいな形の仲間意識をもったグループが形成されていったということの中には、塾生の側が今西さんの魅力にひかれたという面のほかに、今西さん自身の方でもまた、そういうものを求めておったという面があると思うね。

梅棹 あるな。

森下 今西さんのパーソナリティーの中には、この座談には出てきてないんだけど、ぼくはよく感じるのは今西さんという人にはやっぱりさびしがりやの素質が大いに

あると思う。

梅棹 あるな。

森下 わが道を行くというのは山歩きでいえばアライオン・ゲーエン（単独行）に似ている。単独行なら気ままに自分の好きな目標やコースを選んで自由にできるんだけれども、その代りどうしようもないさびしさやおそれに耐えて行かなければならない。その上、このさびしさやおそれも関係するのだが、一人の力ではどうしても登りきれない壁がその目標への途中にあらわれてくる。これらのさびしさをまぬかれ、障害に打ち勝つためにはどうしても仲間が要る。

ところで、今西さんの場合は、片面ひとりで自分の分の道を開いていきたいという、これはパイオニアの一つの典型であるかもしれないけれども、その反面孤独をまぬがれるために仲間を集めチームをつくる形をとらざるを得ない面があるわけですよ。ところがチームをつくるということは、ある面では自分のほんとうに切り開いていきたいという道であろうと、それに対してやっぱりある意味での制肘が入ってくる。そういう中で、今西さん自身の自由な生き方を貫きながらしかも目標に到達しようと思えば自分の行き方を支持し従ってくれる仲間を集めてチームを編成しそのリーダーとしての行き方をとる以外にはないわけですよ。今西さんは、ずっと若

いときから、そういうことを積極的に意識してということじゃなくても、リーダーとしての道が自分の道やと思いで定め、そのための努力をしてきたと思うのや。もちろんこれには今西さんにリーダーとしての抜群の素質があったということも結びついてはいるやろがね。だから山の世界であろうと学問の世界であろうと、今西さんの行く所すべて今西グループというものが次から次へと、グループ自身の中身は変わっても、できてくるということには、今西さんの側からの呼びかけも大いに関係していると思うね。ただしグループに参加する人たちの方からいえば、今西さんの示す道に積極的に同調するということがばかりでなく、今西さんの人間的魅力にひかれての要素も大いにあるにはちがいないけれど。いずれにせよ、しよせん今西さんはリーダーでなければおさまらないし、またそれが一番ふさわしい人やろね。

梅棹 今西さんという人は、若いときからしかし何べんも動揺もあり、何べんも何べんも、どっちとろうかということを迷うた人なんや。それはグループの中へ入れたら、抜群のリーダーであるという素質は若いときからあったと思う。これはおそらく山を通じて培われたものだろうとは思いますが——そのほかにもありますがね——しかし、一方では常に疎外感を味おうているわけです。常に既成体系からアウトになっている。アウトになって、

そのたんびにやはりそこでリーダーという、いまおっしゃったとおりですけど、やっぱり迷いがあるのよ。自分は孤独で生きるべきか、リーダーで生きるべきかという迷いがずっとあったんだと思う。

森下 それは、今西さんのある意味では矛盾した側面かもしれないけれども、ただ今西さんはやっぱり、それをいまみたいなリーダーとしてのやり方でもって、なんとか統一してね。

梅棹 統一は必ずしもできていない。いっぱいぼろは出ているけど、今西さんはそこで、まあ何と申しますかね、いまでも残っているけれども、孤独ポーズというものがちょっとあるんです。自分で孤独だという……。

森下 そういう意味で、いつも今西さん自身に何か一つのさびしさというものを、ほくらはやっぱり感ずるわけなんや。

梅棹 さびしさをむしろ大事にした人かもしれないな。それを私らは、ある意味でポーズだなんていうけどね。

それから今西さんに野人ポーズというのがあって、しょう。あれは完全なポーズであって、今西さんは何も田夫野人どちがいますよ。大インテリであって、全く日本の学問の一番正統的なところから出てきた人です。ところが野人ポーズをとりたがるわけや、おっさん(笑)。それはやっぱり、いまの問題がある。つまり、一九二〇年代

以後の日本の知識人社会のあり方に問題が出てくるんです。

私は、きょううちよつと頑張つて言いたいことは、今西さんのパーソナリティーとかそういうことでは片がつかへんのやということですよ。これはもう少し、日本のそこそ知識社会的な問題としてとらえたいという観点があるわけや。これは日本文明の、明治以後六十年ぐらいたった段階での、日本の社会の成熟の中から出てくる。

それはおそらく、ほかからも幾つもそういう動きが出てきていると思うんです。そういう文脈で整理した例というのはあまりないから、私もよくわからんけど、私は、自分でやっぱりその中で生きてきたという意識がある。これはやはり日本の社会の一つの成熟現象だ。

そこで、もうちょっとその話を延長していえば、それ以後、つまり私が学生のとき、あるいは大学院時代、今西塾というものが、あるいは今西さんのような人物が、どれほど惨憺たる状況におかれていたかということをもう一ぺん回想せないかん。もちろん出自からいえば全く正統的な帝国大学の中心部にいるわけでしょう。全く正統的でありながら、しかもその帝国大学の正統の中では常に異端として排除されているという、そういうシチュエーションにあるわけですよ。その中で非常に激しい闘争みたいなものがぼくはあったと思う。それは学問

の内容からいうても、一つの社会的な……。

森下 だから、そういうところでまた今西さん自身が絶えず仲間を求めているという形が続いているのや。

梅棹 歴然たる新興勢力ですわね。たとえばそれを非常に端的な形でいえば、今西さんが教授になるかどうかというのが決め手なんですよ。京都帝国大学の中で教授になるかどうかというような、えらいなまぐさい話になってしまうけど、ぼくはそうやと思う、これは。

森下 それはまあ、そういう側面はあると思うけど、しかし今西さん自身が、いわば大学の中における正統的な学派からすれば異端の道を歩いてはった。しかし、その異端の道自身が好きな連中がたくさんいたわけですよ。

梅棹 ぼくは違うと思う。それは異端が好きな人と違うわ。

森下 今西さんの傘下にはせ参ずるというのは、ある意味では異端だったわけですよ。

梅棹 それはまあ異端です。しかし、わざわざ異端が好きな人と違うてね、異端でもかまわん、ということであつて、やっぱり根本は学問が好きであるということがあつたと思うんです。少々社会的異端でも、まあやむを得んわということでしょう。

森下 そういうことじゃないんだけど、やっぱりそれぞれ学問が好きで、たとえば教室の中の地位とか何と

かいうことよりも学問自体を、特に既製の学問のわくをはみ出した新しい学問の道を拓こうとすれば、それはタテ社会の中では異端の道をえらぶことになるわけですよ。自分自身では全く正統だと思っていでもね。このような異端へのあこがれがやっぱり今西さんと一緒に行動するもつとをつくっているにちがいないという感じがするね。

梅棹 それは心情的にいえばそうですけど、ちょっと距離をおいて見たら、おそらく世界の、たとえばハーバードあたり、あるいはケンブリッジでもオックスフォードでもパリ大学でも、かなり近いことがやっぱり繰返し起こっているんじゃないか。そういうことが起こり得るように日本の学界も成熟してきた。単線型の官僚教授コース以外のものがでてきた。それは一九三〇年から四〇年代ですよ。それはやっぱりリベリズムでしょう。私らの世代は完全におっしゃるとおり学問好きなんや。学問だけ考えて、人生が設計できた世代です。

私は大体四〇年代に、今西さんと一緒に行動してきたんですけども、その前、三八、九年ぐらいからずっと交渉があるわけです。つまり戦争直前のところですけどね。実におもしろいことに、ああいふ戦争に近づいてきたところで、全く自由な学問というもので一生わたってやろうという一群のやつが、ワーッと出ているわけやね、そ

ういう学問というものが紐帯になり得るというのは、私はいへんおもしろい現象だと思っんですが、そういうことが起こった。地位とかあるいは社会的系列とか、全部はずれているわけや。それがヨコの原理なんやけどね。ヨコいうたって、それも塾というけど、さっきちょっと誤解を招きやすい表現をしたけれども、もちろん中心になっているのはやっぱり学問ですよ。学問の連帯というようなものがあるわけですね。それがそういう一つの学界という、大学という社会の中で、明治以後ずっと流れてきた一つのプリンシプルからはずれてきたやつが出てきたということやとぼくは見ている。それはそれ以前にもあったかもしれないけれども、こんどはもう大はずれにはずれた……。

大教養人としての今西錦司

森下 そういう面で、いちばんはずれをつくったというのかな、非常にはつきりした形で出てきておったのは、当時の昆虫教室ですね。その時分にちょうど湯浅八郎先生がやめられて、教授のいない時期がしばらくで来た。それでわれわれ大部屋におった連中が語ろうて、教室出身の先輩たちを集まってもらって次期教授を推薦するということをやった。これは、その当時の大学からいうたら破天荒なことですよ(笑)。そのとき、今西さんを推薦

したんや、投票をやつて。それを教室のほかの教授のところへ代表がおそるおそる持っていったわけや。そしてら、まんまとけられた、結果的にはね。それが教授たちの間でどういふ論議を呼んだか、ぼくらは知らんけどね。河合 何年頃のことですか。

森下 昭和十年か十一年ですな。ぼくが卒業して間もないとき。

梅棹 つまりそれは、やっぱりさっき言うたことやと思います。教室を主宰する教授の席を取るか取らないかという問題があるんですよ。それはそういうふうに言うてしもうたら、ほんとに世俗的でおもしろくない話になるけどね、これはやっぱり明治以来のタテ割りの正統派でそのままいくのか、新興勢力がそれを塗りかえるのかというところなんで、常に新興勢力の負けできたわけや。

理学部の場合でも、川村先生がやめはるときに、次期教授候補ということで今西擁立の動きがずっと出てくるけど、完全にアウトや。それはまだがんとして、明治的帝國大学主義というものが流れているんです。理学部でも官僚教授による学問支配というものがどんな徹底したものであったか、それはぼくら学生るとき、思い知ったもの。われわれはもう違ふんです。リベラルですからね。学問の官僚支配から全く違ふところから出ているわけでしょう。私の大学時代というのは、そういう意味でも闘

争の歴史だった。

それで、新しい新勢力として出てくるわけだけれども、もうちょっとそこでさっきの話の関連でいえば、やっぱり今西さんという人が出てくる大きな一つの背景になっているのはリベラルであると同時に、教養だと思ふ。これはおそらく、だれもこのことを指摘してはらへんと思ふのやけど、みんな学問、学問言うて、今西さんの学者の面ばかり評価されているけど、大教養人だということとをなぜいわないのか。たいへんな読書家であり、ほんとの教養人だということですね。私がなぜそういうことをいうかという、私が入ったところの京大理学部というようなものは、いかに非教養人が多かったかということなんです。職人さんですよ、みんな。せまい専門の学者としてはえらいかしらんけど、ほとんどが職人さんです。職人として一流かしらんけれども、とにかくともなインテレクチュアルとしての会話はほとんどできないんです。私にはそういう欲求不満が常にあった。

森下 ぼくらが大体今西さんにひかれたというのはね、もともと昆虫研究室におりながら、研究室の今西さんの本立には昆虫の本なんか一冊も見当らんで、ほかの本ばかり置いてはったというところにやっぱりひかれたわけやね。

梅棹 そんなん、ほかの先生にはあらへん。学問のこと

しか語る能力がない。みなさん専門の学問のことは語るけれど、人生にはほかにさまざまなことがありますわね、宇宙から日常のことまで……。

河合 その流れはよくわかりますね。いまの教養人か職人かという点では、ぼくたち戦後に入っても、大学人に対して非常に飽きたらなかつたものがあるわけですね。それでぼくは、梅棹さんに弟子入りしたんですけどね。

梅棹 そうや、あんたも来たわな。

河合 ぼくと徳田は梅棹さんの最初の弟子でした。そのことを通じて今西さんを知っていったんです。教養人という、むしろなんかさげすんだ意味でときどきかわれるけれども、そうじゃなくて、ぼくとか徳田は今西さんのもっているまっとうな教養人の流れというものに、ひかれていったと思いますわ。それまで、つまらん、つまらん言い続けだつたわけですよ。

梅棹 何か、ともに語るといふことであつたわけやな。それはわれわれでもそうでね。その意味では、旧制高校のエッセンスみたいなものが今西さんにはやっぱりあるんですよ。

ところがやっぱり、明治以後の一種の成熟現象で、国家はそういう職人学者を相当抱えることができるようになっていた。その人たちが全部教授になり助教になつてちゃんとしたシステムをかためている。一方で、幅の

ひろい相当の教養人というのもしっぱい出てくるわけでしょう。その人たちが学問しようと思うときに、ぶつかるとですよ。ぼくはその問題だと思ふ。

そこへ今西さんという人物が出てきて、一種の教養派……という誤解があるな。成熟した文化人、まあ文化人という言葉もいやらしいね。何かそういう、ある種の総合的な知識人学者がでてくる。結局、それが勝つんです。そして勝つて、戦後の歴史はむしろそれだと思ふんだけどね。

森下 ちょっとその時代の問題を考えてみると、ぼくらそういう今西さんの、同じ学問の世界でも、狭い一つの専門の中に局限されないで、いわば非常に広い立場で一つの学問を形成していこうという、そういう姿勢というものにはぼくらにとっては最大の魅力であつて、だからこそ、そうやってみんなついていったわけですよ。

ただ、一つ飽きたらない点があつた。それは何かというと、社会科学的な問題からいえばその経済学的側面、あるいは生態学的な考え方からいえば、量の問題ですわね。もちろん今西さんは全然量を無視しておつたというわけではないのですが、これの考慮の度がぼくら、どうも今西さんの中では少し飽きたらん点やつたね。そこで、今西学の中にありながら、なおかつ、そこから量的生態学というものをつくらなきゃならんという一つの旗

印を、可児君なんかと一緒に掲げたわけやね。もちろん、それは今西さんだけじゃなくて、その当時の生態学、少なくとも日本の生態学では最大の欠陥であったわけだけれども。今西さんの見事な体系も、こういう点から見直すことが必要やないかという、ちょっと反旗を翻すみたいな側面もわれわれの間ではでてきたね。いうなれば今西学の中における異端かもしれん。しかし、実はそういう精神も今西さんと接することによってかえって生み出されたものであるかもしれん。

梅棹 そこでつまり、森下、梅棹という数学で学位をとるといのがあらわれてくる(笑)、大体そうやな、ぼくらは数学派や。

森下 それはまた、今西さんにとってちょっと気にいらん点の一つでもあるわけや(笑)。

梅棹 しかし実はね、それはいまの話やと思うのやけれどね。私らはそのころ全く自由に遊びほうけているわけでしょう。ほんとうからいうたら、もっとしっかり学問せんならんというときに、ポーツとして数学の本読んどのわけですよ。＃あいつは専門の勉強もせん、数学の講義聞きに行ったりして、いったい何をしとんのや＃といわれる。しかしそれがだんだん積み重なって出てくるわけですよ。

森下 そういうふうな態度自身が、ある意味でやっぱり

今西さんから学んだということがある。

梅棹 学んでるわ。今西さんはそういう人なや。その点では完全に学問的遊治郎であると……遊び人の世界や。

森下 おれと同じことをやれという意味での教え方じゃなくて、つまり教えるならば、おれみたいは何でもありとあらゆる面と一緒に考えてやれよ、というふうな意味での教え方であったわけやからね。それでぼくらは自分の勉強を自分で雑学やというていた。

梅棹 同時に八方破れみたいなところがありましたね。何でもええやないかというような……。

河合 今西さんの教養人というのは、文化的背景、たとえば今西さんが西陣の織り元に生まれたという、非常に成熟した文化の中で育ったところにも関係しているんじゃないですかね。

梅棹 それは関係ないわけではない。たとえば今西さんの食いしん坊ね、これもそういうことと関係があると思う。食文化ということやね。それはありますけど、ぼくはちょっと、それでは何か説明のつかんものやと思ってる。もう少し時代的なものを考えないかんと。

その当時でも、文科の人だったら教養人はいっぱい出るけど、全部大学から出ていくわけです。そして外で自由な世界を構築する。文壇とか、いわゆる評論家のグ

ループとか、思想家とか……。ところが大学のまん中に居すわって、しかも自然科学のなかでこれをやったというのが、今西さんの意義だと私は見ている。つまり、大変高い教養を持った一群のグループがここに出現したと……。

森下 ぼくらにとっても、やっぱり今西さんは一つの心のよりどころであったということはある。ほくも大学卒業して、長いこと無給副手で……。笑。

梅棹 長いことおったなあ、森下さんも。

河合 さきほど野人ポーズといわれたけれど、今西さんは野人で、野性味があつてという点ばかり強調されているでしょう。

梅棹 違う。本質的都会人で、大文化人で大教養人だ。

ここのところ見のがしたら、これはわからんですよ。

河合 今西さんが大変な読書家であつたということです。が、宮地（伝三郎）さんが、ときどきぼくらに忠告したことを想い出します。「いまの若い人は今西さんの外面しか見とらん。非常に行動的で、何か直感的、衝動的で、そういうだんびらを振り回しているのばかり見ているけど、あれくらい本読んでいる人はありません。それを見習わんといかん」といつて。だから、知っている人は知っているわけです。

梅棹 野人であり行動人でありというようなことは、む

しろポーズなんです。まあそのポーズもかなり成功したと思うけど、たとえばこういうことがある。今西さんと蒙古と一緒に、たとえばウマで行くわけで、そのあとを荷物積んだ輸送隊の牛車がついてくる。その牛車から今西さんの行李を降ろしたら、中にぎっしり本が詰まってる。それでみんな若いもんがテント張って炊事の準備やらしている間、おっさん椅子にすわって本読んでるわけや。その読んでいる本が、哲学の本とか、社会学の本とか、そういうものばかりなんです。大変な人です。

森下 ただし、今西さんが読んでる本の中には、ぼくと一緒に蒙古に行ったときはね、砂丘の中でテント張って三日ばかりおったけど、そのときもっぱら『風と共に去りぬ』を……。笑。

梅棹 そういう人やねえ。そういうことの知識をひけらかしたりは絶対せん人やけど、大変なバックグラウンドがあるということは間違いない。

河合 やっぱり、さっきの食いしん坊とならんです。消化力なんです。

今西美学

河合 ところでこれは梅棹さんの大変な喝破だと思っただけども、『今西錦司全集』の解題に書かれた今西さ

んの「特殊美学」、これは今西さんを理解する上の、一つのキーワードですね。ぼくは今西さんの本をザッと眺めてみて、自己完成を非常に大事にして、それに邁進した人だという印象はものすごく強いですね。大体『生物の世界』でも、序文で「これはおれの自画像だ」と書いています。

科学者で自伝は書いても自画像をかくなんていう人は、かつてなかったと思いますね。自画像を描くというのは、全力をこめた自己対決だと思うのですが、その作業が一段落したあとの今西さんとぼくらは出会うわけです。梅棹さんの時代は確かに火花を散らしたというところがあるでしょうが、ぼくらに對しては、今西さんはものすごくリラックスしてはったと思いますわ。梅棹 そうやろな。ぼくらの世代とはちょっと違うわ。河合 だいぶ違うんです。今西さんは、ぼくらにも若き自画像をかけたというのをずいぶん教えてくれたはったと思うんです。たとえば『日本動物記』。あれを書いたのは、大学を出て一年目です。動物社会学の旗上げといった雄大な構想と意図の中で書けといわれるんですが、それはまさに、若いときの自画像をかけと言われたに等しいと思うんですね。自叙伝というのは書く人があるでしょう。しかしそれは回想記ですわね。自画像というのは現在の自分にまっとうにぶつかることでしょう。それをぼやっぱり今西さんは絶えずやってきた人だし、それをぼ

くらにも求めるというか、教えるといえますか、やらしてきた人だと思いませんか。

梅棹 その点では今西さんは確かにホーリストであって、自分自身の全体像をいつもつじつまを合わせる人です。

この座談会でも今西さんは全部舞台へ出てはるわけやろ。これ全部つじつまが合うているねん。それがぼくには気に入らんというんです。そんなと違いまっせ。もっとおっさん、ぼろがいっぱいいて、めちゃくちゃなところがあるのんや。それが何となくつじつまが合うてしもうて、栄光に輝く……。

森下 むしろ、つじつまを合わせる形にもっていくというところは、ぼくは今西さんらしいとこやと思う(笑)。

梅棹 それがホーリストや。

森下 その意味では、今西さんいうものがこの中から出ていると思うね。

梅棹 よう出てる。ホーリストとしての今西さんで、全部つじつま合っている。しかし、ぼくらから見たら必ずしもそうではない。まあ、これはまた私自身の心情に密着した感懐になりますけど、こういいうぐあいにつじつま合わされたら、私ら立つ瀬がないのや(笑)。ほんまに立つ瀬がない。それでもよろしかろう、ええけれどね。今西さんかてやはり何か一つの大きな日本文明のうねりの中で、いっしょに波に乗ってきた人間ですわね。

私いまこの座談会を全部通じて読んで、その意味でさびしさを感じます。

河合 それはおもしろい話ですね。大きなうねりの中で、自分をくつきり浮きたたせるということは、エゴイズムといったものとは異質なもので、やはり今西さんの自己完結性と、梅棹さんのいわれる美学に関係しているんですよ。自分の美学の結晶度を高めるためには、やっぱりものすごく非情なところがあるんです、今西さんは。

梅棹 それはもう一ついえば、やっぱり依然として私の世代の今西さんとの激烈なる抗争というのはまだ続いているんだということかもしれない。なんだ、このオヤジと……(笑)。

私はいまこの座談会を通じて見て、大体私らが名前もほとんど出てこないし、学問的にも全然関係ない世界がある。

河合 そうです。

梅棹 そうやる。

河合 だから、ぼくらにはものすごくわかる。この一連の座談会はわかるわけですね。

梅棹 ぼくからも、それはわかるよ。わかるけど心情的に違う。

河合 「わかる」というのはね、ぼくらの世代以後の世界のことなんですよ。

梅棹 私が感じているそういう摩擦というか矛盾という

ようなものは、やっぱり私の美学との衝突であって……。森下 だから、それはそういうことなんで、梅棹さんが気にいらんというのはわかるけれども、これはいわば、今西さん自身のもっと内面的な問題ともひっかかってくるわけですよ。ただし、こういう形の座談会で、この目的が、今西学というのはどんなものやらかという形での、いわば一つの完成された、あるいは未完成かもしれんけど、ほぼ完成されたような形のを求めてはるならば、それはもう、このところまで出ていることで十分あるということになる。

梅棹 それでいいと思うねんけど、そこへちょっと私の主体性を押し出させていただくならば、その巻き添え食うのはおもしろくない……(笑)。

今西学の学問的性格

梅棹 私が若いときから感じていることを一つ申し上げますと、今西さん以外の人は全部ヨーロッパあるいはアメリカ留学組なんです。その人たちは、ヨーロッパやアメリカで自分で体で学んできた学問なんです。それは手についた職なんです。結局、職人芸で全部きた。そういう自然科学であった。今西さんは全くその経験がないから、今西さんにきて初めて、この系統の学問が理論

で入ってくる。つまり、理論というか、論理として入ってくる。論理というと非常に非現実的な響きをもちますけど、そうではなくて、ここで初めて理論が消化されるわけです。それは、ヨーロッパ文明と日本文明との対決みたいなことが初めて起こるんやと思う。そのところが大変重要なところで、だからある意味でぼくは日本文明の成熟だという評価をしているんだけどね。つまり、留学をしないで、真正面に対決をした。その前の人は全部輸入業者ですよ。今西さんは違う。そこがかなり大きい問題じゃないか。それは各学界のあっちこっちで同種のことが起こったかもしれない。ちょうど今西さんにあたるような人がいるんじゃないかな、何人か。そういうつまり、自然科学で、西洋思想と日本思想との一種の対決というところを通じて新しい展開をしてみた。

それをもうちょっと人間的な意識の、レベルを下げていえば、ヨーロッパへ行った人、アメリカへ行った人は、自分をマルクスやらダーウィンに匹敵することは思いもよらんと思うな。今西さんにおいて初めてこれが可能になった。それはヨーロッパに行くとらんから、おっさん(笑)。

河合 生粹の日本人、生粹の京都人だということなんです。ぼくはやっぱり、それが西陣の生まれということろにつながるものがあると思うんです。山がアルプスで

はなくて北山であり丹波の山であり、京都とその周辺というものと密着した文化的土着性みたいなもの——文化的に成熟したほんものが心の髓まで入り込んでしまったというようなこと……。

梅棹 ぼくも同じ京都の西陣の生まれやから、それはほんまによくわかります。つまり西洋何するものぞ、というほど負うたものじゃないけど、たとえば、やっぱりこれは北京とか洛陽とか、そういうところに匹敵するところなんだ、一個の大文明のセンターだという意識は、これはありますわ、やっぱり。そこによそのものが導入されて少し花が咲いてきた。べつに勝負というほどのことはないけれども、ここはここで勝手なこと言うてもよろしいやないかという、その意識はあるな。

河合 今西さんは探検の座談のところ、「探検の原動力はライバル意識だ」ということをはっきり言っていますね。西欧との対決というところでの猛烈なライバル意識みたいなものが出てきたし、それが成立する土台があったんでしょね。

梅棹 まあ世界全体としては、客観的にはなかなか通用せんかしらんけれども、それは私らでもありますわ。

やっぱりどこも、ライバルというか、匹敵するかというたら、もちろんパリでありフィレンツェでありロンドンであるというようになりまますわね。大学としても、

もちろんそれは客観的な力は少々及ばないかもしれないけれども、意識としてはハーバードでありオックスフォードだという、それがありますね。何を言うたってかまへんやないか。ところが、そこへ行って学んできた人はあかんのや、それが言えんようになって帰ってくる。われわれには知らん者の強味みたいなものがあつてな。

森下 今西さんという人は、こういう初期の時代から考えてみると、いわば何ものにもとらわれない一つの見方というものを最大限に求めはったわけやけど、しかしそのプロセスとしては、新しい考え方というものを、ほかの人の考え方であってもわりあいにフリーに取り入れようとする、そういう側面はありますね。

たとえば、ぼくら覚えているのでは、ぼくらが卒業したところだったな。今西さんが「無人島に一人で暮らさなければならん。一冊だけ本持っていつてええ」という条件をつけたならば、どの本持っていくか」という問題を出さはった。ぼくはどういう答えしたか忘れたけど、今西さんはそのとき「ぼくはエルトンの『アニマル・エコロジ』を持っていく」といわれた。

梅棹 へえー。

森下 そういう話をいまの若い連中になると、びっくりしよるわけやね。今西さんがそれだけエルトンというものを——エルトンの本が出て間もないころですが——高

う買うてはったということ、ほとんど想像しないらしいね。事実エルトンは、それで少なくとも動物生態学に一つのエポックをつくったという本ですよ。だから今西さんにとっては、やっぱり一つの新しい目を開いたといった面があつたにちがいない。

ただしかし、今西さんの偉いところは、いつまでもそれだけにはとどまらないというところがあるわけやね。クレメンツの話が出てくるけれども、やっぱりクレメンツに対する評価なんかでもそうやったんや、初めはね。実に壮大な学説であるわけだから、一応それに対するいわば一つの心酔しはった面がありますよ。しかし、今度はクレメンツをいかにして脱却すべきかというところが、やっぱり自由人としての今西さんが志さはった意識もあつたわけやね。だからダーウィンの問題も、やっぱり同じ問題であるわけや。今西さん自身も、ダーウィンを否定することではない、自然淘汰説に対する否定やという形を打ち立ててはるわけだけれども。今西さんにとっての問題は一つのこれやという考え方は取り入れても、その中からどのようにして自分のものをつくっていくということやね。受け入れじゃなくて、ほんとに自分のものになつたものは、今度はエルトンでもなければダーウィンでもない、今西さんのものだという形のものをつくっていくということやね。学問は模倣ではなくて建設する

ものやというのがいわば今西学の真髓みたいなものだろうが、その建設のためには、どこまでも広く素材を求めるといふのがまた今西流の行き方やね。そのような素材の中にすぐれた学説があつても今西さんにとってはそれはやはり素材にすぎない。それを使いこなし乗り越えるまでは今西さんは満足できない。これは一貫した行き方やね。これは探検でも同じ問題やけど、やっぱり開拓者の精神でもって貫いてはるということになると思うな。

梅棹 私さっき言うたことの文脈をもうちょっと延長して現代にあてはめたら、私はまだ闘いは終わっていないという感じがする。今西さんはなるほど、現在そういう道をたどってきた人としては、ちょっと稀に見る成功者である。社会的に見てですね。こういうことは、ほとんどむつかしいわけですよ。大体もう、異端が主流に置きかわつたみたいな格好にいまやなつてゐるわけやね。非常に珍しいケースだと思ふ。珍しいケースだということとは、まだこれは完全に日本の学界全体がそういう体質にはなっていない。明治以来のタテ割りシステムの官僚教授の支配というのは、まだ完全に崩壊していない。今西さんはその中で珍しいタイプで自分自身の自由な学問を、アカデミズムという非常にリジットな体系の中で育てることに成功した人だと見てゐるんだけれども、ほんとうはこういうものがもっともつと出てきていいんだ。

ところがまだ日本の全体としては、そういうものに対する抵抗というか、障壁は大きいね。

今西学の真髓

河合 ところで、今西さんを批判する場合のむつかしさというものを身をもって感じますのは、今西さんというのは、直感がものすごく冴えてゐるわけですね。細かいところは、これはおかしい、あれはおかしいと思うところが幾らでもあるんです。ところが大筋が合つてゐるといふか一本通つてゐる。それでうかつなことは言えん。十分自分の中で醗酵させてからでなければ、批判が上面をなでるだけになるといふ自戒みたいなものがあるんです。たとえば、最近今西さんがものすごく好んで言われる言葉がありますね。直立二足歩行というのは立つべくして立つたとか……。

梅棹 言葉はしゃべるべくしてしゃべつた……。

河合 そういう言葉を今西さんはいま連発してゐるんです。これは自然科学の範疇の言葉からは逸脱してゐると思うんですよ。今西さんの進化論を『私の進化論』をはじめずつと読んでみたんですけれども、これは自然科学じゃなくて自然哲学だという印象が強いです。

梅棹 いや、哲学じゃないやろなあ。

河合 新しい自然哲学だとしか、ぼくには思えないんで

すよ。たとえば今西さんの書いてはることを見ますと、こうあるべきだとか、あらねばならないとかいうような言葉がどんどん出てきて、その積み重ねの論理が続いていくわけです。上山春平さんが指摘した類推の論理の展開ですね。その限りでは、なるほどと思わざるを得ないんです。その論理の行きつくところがどうかというのと、最後に「立つべくして立った」というようなことになっていくわけです。だからこれは、演繹と帰納といった自然科学の論理の対象としてのみ扱うと、今西さんは教祖みたいなことを言う、といった批判につながってしまう。今西さんはいま自然科学の場にどのような形で足をのすしてはるのかということを考えてみる必要があるのですね。今西さんはあるときには、「進化という問題は自然科学の対象として扱えるかどうかわからない」というようなことを言っておられる。だからぼくは、今西さんという人をむしろ自然哲学者であり、一種の思想家のような側面であらえなければ、十分理解できないと思いますね。

梅棹 ぼくは、哲学者とは必ずしも思わない。思想家であることは間違いないけど。

森下 そういうふうな表現は、『生物の世界』を書いてはるころでもやっぱり同じような、というよりもっと理解しにくいような表現をつかはった。たとえば「壁に

も生命がある」といったような表現ですよね。こういう言葉を聞いて、ぼくら可児君と一緒にこの言葉に含まれている今西さんの真意は何であろうかということ、一生懸命考えたことがあります。なにもそれは、今西さんが観念論的に「すべてのものに魂がある」とかいうふうな形で言うているわけではないんですよね、これは。今西さんの一つの論理的な、仮りに唯物論的に考えた場合でも、一つの論理的提起を、そういうふうな表現でしてはるわけなんですよね。そういうところの底にあるものをほんとにくみ取らなければ、今西さんの批判というのはなかなかできない。

梅棹 それは今西さんの学問というのは、頭のかたいやつにはわからないのや、これは。あれを理解するには頭がよくなかったらあかんということがある。

河合 ありますね。

梅棹 ほんとに、そういう点がある。非常に精密な論理がピシッとあるわけでしょう。しかもその精密な論理を、パッと飛び越えたものがまた出てくる。

河合 『生物社会の論理』というのは、それこそ今西さんの美学の結晶だと思えます。結晶さすために、大変な切り捨てようをしてはると思う。今西さんの背景にエルトンがあるということはよくよくわかるんですけれども、たとえば、食う、食われるというようななまぐさいとこ

ろを、あそこでは全部切つてあるんです。論理的な美しさというものが、非情な切り捨てによって成立しているというのは、言いすぎでしょうか。一方、今西さんは、何を切ったのか、そして切り捨てたものの重要さを知っていると思うんですね。『人間以前の社会』というのには、『生物社会の論理』とコインの両面のようなものです。そこでは種内関係と個体を個体と個体の非常になまぐさい問題として展開されているわけですね。ところが今西さんはなまぐさいを、種間の問題までは広げはらへんわけですよ。その理由は何か、一つはエルトンに対する反措定的なもの、そして自分の美学をつぶすようなこわさみたいなものを今西さんには知ってはるんやないかという気がするし、一方では、そこまでまだ今西さん自身の中で成熟してないんじゃないかという気もするんですね。

梅棹 ちよつと数学者みたいなのがあるやろ。

河合 ぼくは『生物社会の論理』は、全く今西さんの幾何学だったと思うんです。代数幾何が『人間以前の社会』なんですわ。

梅棹 ちよつとそういうところがある。数式の美しさみたいなところがあった(笑)。しかし、数値計算法あるいは実用数学みたいなことは一切やらんねえ、今西さんは河合 そうそう。それはものすごくきらいなんです。

森下 今西さんのそういう美学の根底には、やっぱり自然いものはそのいう形でつくられているんじゃないかという、これはやっぱり長い間自然を見てきた一つの結晶なんですわ。長い間のそういう観察いうものが、裏づけとしては実際みなあるわけですよ。その裏づけをいちいち出さなくても、その結晶だけを今西さんは取り出してこういう説を出しはるわけですからね。その一つ一つの裏づけがなければ納得せんという人には、なかなか納得しがたい面がそれはあるでしょうね。

河合 だから今西さんはこの座談会でも、「自然に存在するものはみな存在する」という、何か全肯定の立場をバツンと出してはるわけです。今西さんの考え方の根本の一つというのは、相対立しながら相補うという相補性の原理ですね。そういう考えがどうして形成されたかということについては、たとえば西田哲学の問題との関連が強いわれますね。それも大切なことだと思ふんですけれども、きょうの話は今まで語られてない今西さんの学問形成についての源泉を照射したと思うのです。今西さんがものすごくさびしがりやだったという話ね。片っ方でもものすごいリーダーシップを持った人だったということ。何か自分の中にいつも非常に矛盾をした要素をもっていて、自分自身でいつも統一しなきゃならないという、そういうものがいつでもあったんだろう。そういう

個人のパーソナリティーとか歴史の中から、『生物の世界』に示されたような思想というものは生まれてくるんだなどということ、私は今日非常に興味をもって伺っていました。そしてもう一つ、今西さんという一つの人格なり学問の形成を、日本におけるインテレクチュアルの形成の歴史の中でとらえるという試み、文化史の中で位置づけ、これは今までさまざまな形でなされてきた「今西錦司を語る」の試みの中で、ぬけていた脈絡だと思いません。そしてまた、お二人が指摘されたように、一連の座談会は今西さんの明るい面のみが描かれている。しかし今日は今西さんの影の部分に話が及んだということ、こういうことはあんまり聞いたこともないし、私自身非常に感銘深かったんです。進行役として大変ユニークで有意義な話を聞かせて頂いたことをうれしく思います。ありがとうございます。

梅棹 今西さんの言葉でいえば、まさに生まれるべくして生まれた人やな。

(了)

